

お兄ちゃん、 ボタンつけて

作 若林大貴 / 絵 清水アイ

私は
介護の仕事に就き

まだ10カ月の
新人です

営業職の
サラリーマンとして
働いていた私が
転職を決意したのは

大好きだった
祖父の死が
きっかけでした

実家で共に
生活していた
祖父は

年を重ねるごとに
頑固になり、
家族とのコミュニ
ケーションがうまく
いかず

次第に
家庭内で孤立
していきました

そんな中、私は
転職のため実家を
離れることにな
りました

私をかわいがって
くれていた祖父は

あいつはいつ
帰ってくるんだ？

とても
寂しがっていた
ようです

しかし、祖父は
そのまま病気で他界

私は臨終に
間に合いません
でした

祖父に寂しい
思いをさせたまま
逝かせてしまったと

私はひどく
後悔しました

祖父のような
高齢者やその家族を
支えることで

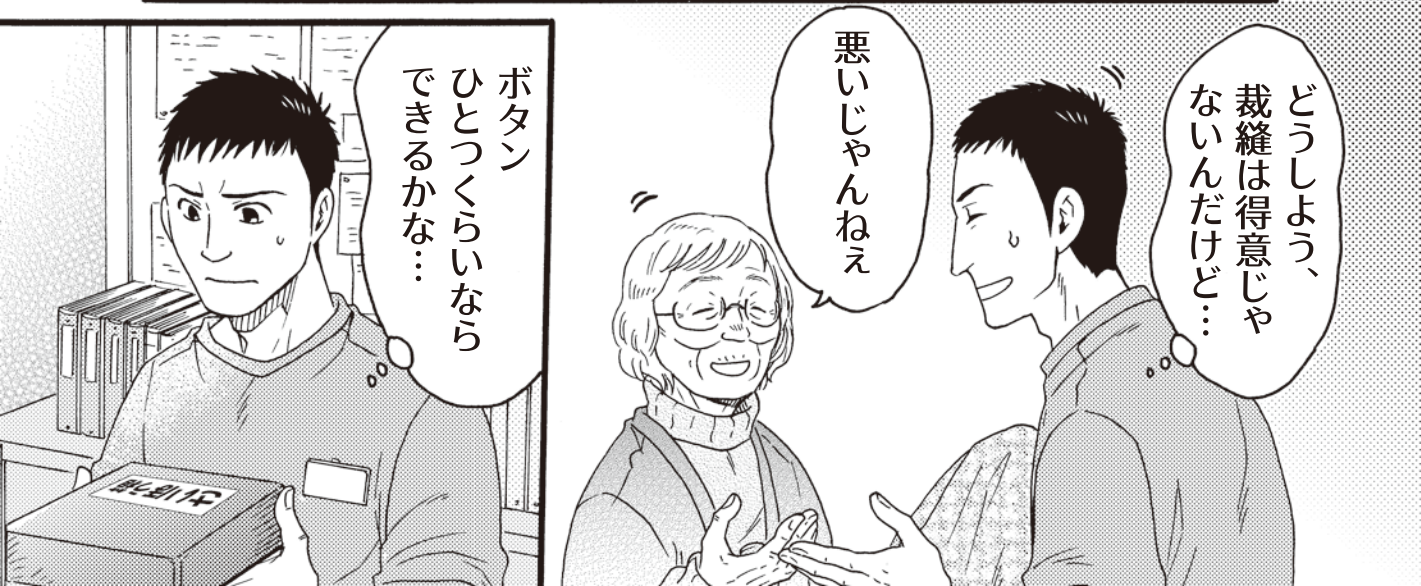
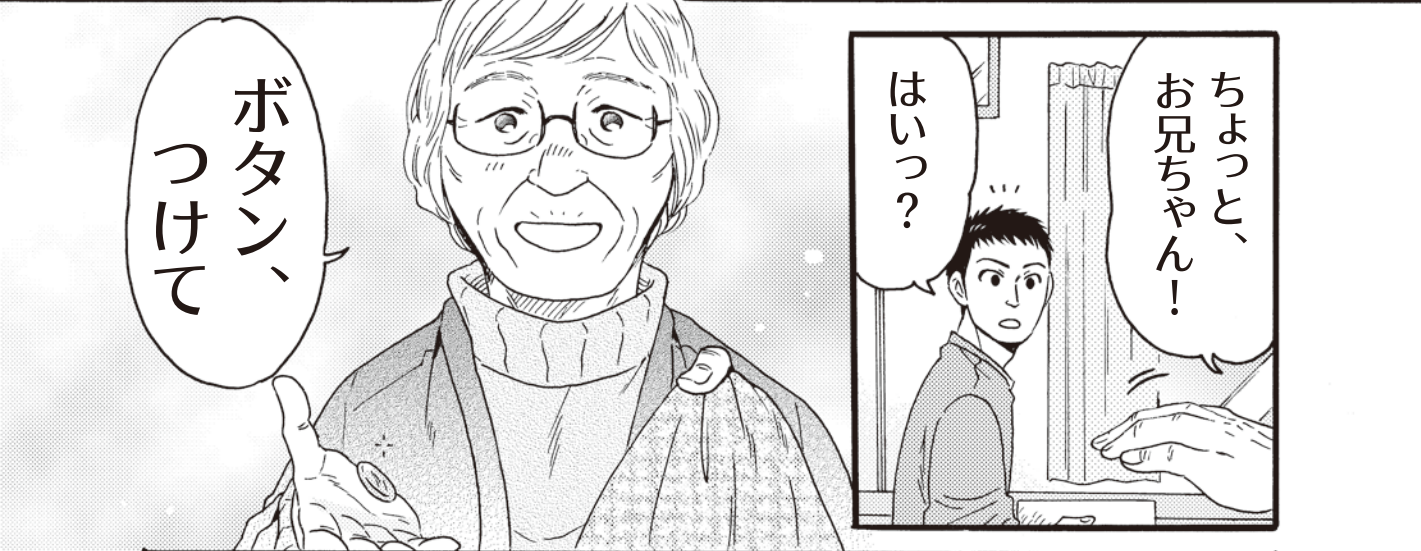
少しでも祖父への
恩返しをしたい

自分たちと同じ
ような状況にある
家族の助けになりたい

——でも、
介護の経験が
全くない私は

そのような思いから
介護の道を
選んだのです

先輩スタッフとの
知識や技術の差に
焦ったり悩んだり





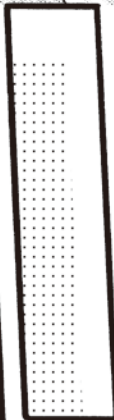
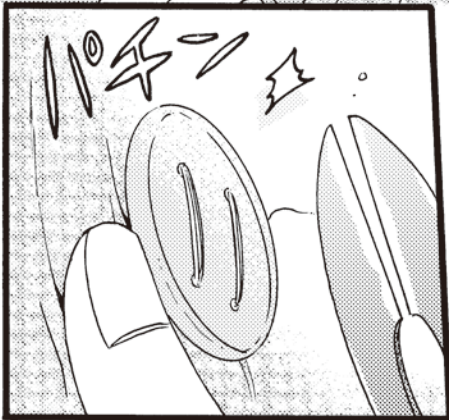
自分で何とか
やってみよう！

あまりもたもたしていると
不安にさせてしまうし



す、すごく
見られている…

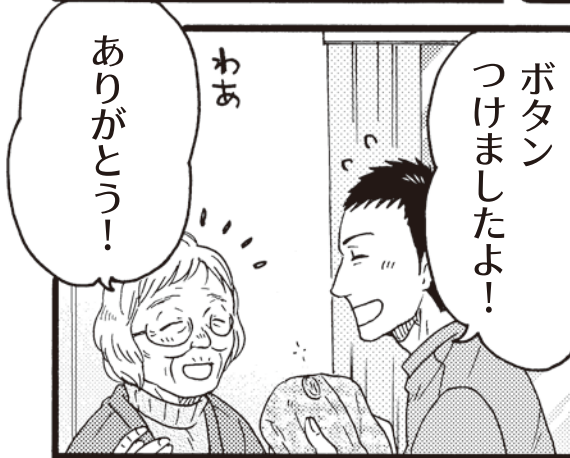
はっ



ちくちくちくちく

先輩にボタンの
つけ方を教えて
もらうわけにも
いかないし…

いんて
あ、んさな…



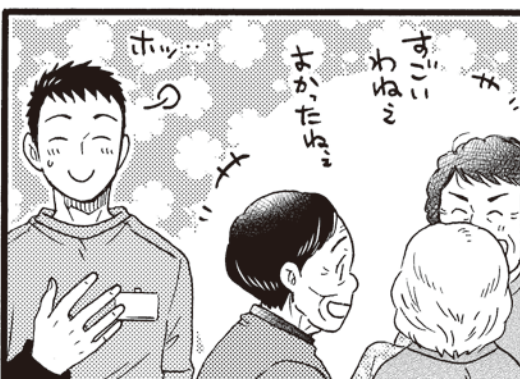
ボタン
つけましたよ！

ありがとう！

おめ



できた…！



ホッ…

おめ
おめ
おめ

おめ
おめ

おめ
おめ



ポロポロ...

あせっ

ど、どうしたんですか...?

何か失敗したかな...!?



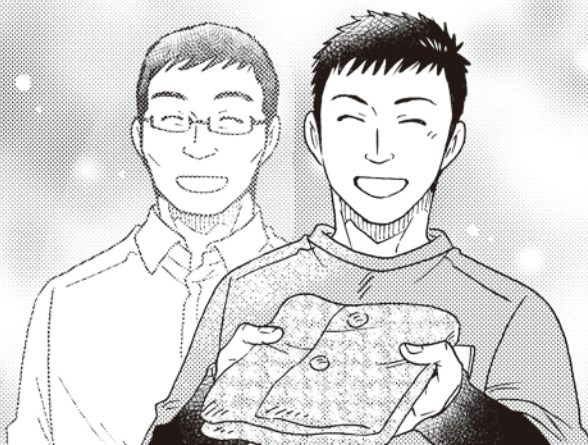
ポロポロ...



息子に優しくしてもらったみたいで

うれしくてうれしくて

思わず涙がこみあげてしまったようでした



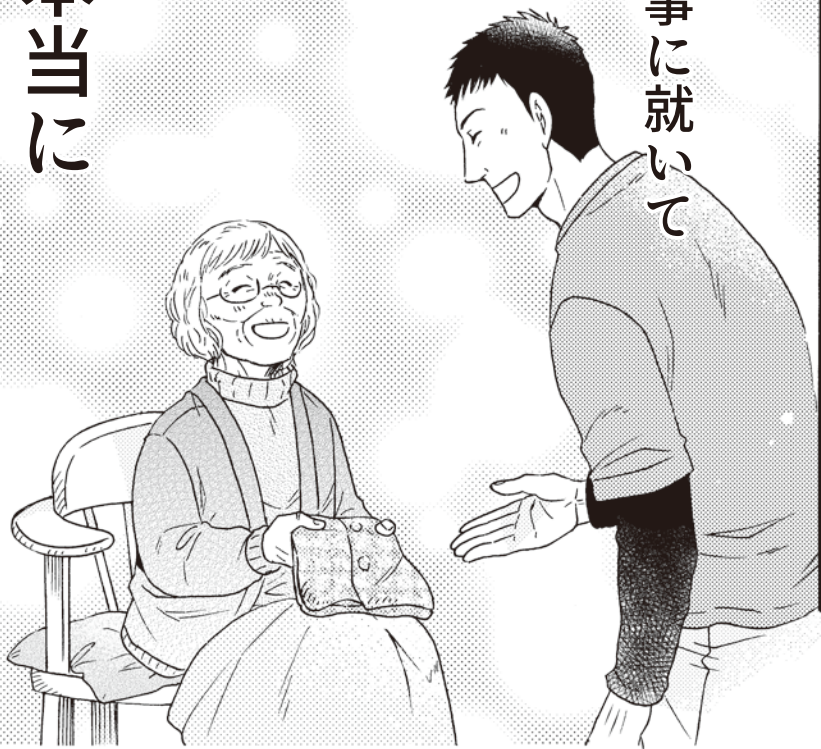
その方は、時々しか会えない息子さんと私の姿を重ね

ボタンつけは
ほんの
些細なこと
だけれど

小さな優しさひとつで
こんなに温かな気持ちになれる

僕は
この仕事に就いて

本当に
良かったです



「やまなし介護感動ストーリー大賞」準グランプリ受賞作品

「お兄ちゃん、ボタンつけて」若林大貴

私は介護の仕事に就きまだ10カ月の新人です。以前は営業のサラリーマンとして10年間働いていました。大好きだった祖父の死を大きなきっかけに、介護の世界でご本人やご家族の支えになりたいと思い転職しました。経験が全く無い中でスタートのため、先輩スタッフの方々と介護知識や介助技術に大きな差を感じます。心折れそうになる毎日。

その中でも大きな喜びを感じる出来ごとがありました。1人のおばあちゃんのお洋服のボタンが取れてしまい「お兄ちゃん、ボタンつけて」とお願いを受けました。不器用なうえ、裁縫は得意ではありませんが、ボタンの1つくらいならと思い引き受けました。一生懸命ボタンをとめ直したお洋服をお返しすると「ありがとう」と、満面の笑顔で受け取ってくれました。私は小さな達成感に浸っていると、その方が今度は涙を流していたのです。慌ててどうされたのかお尋ねすると「息子に優しくしてもらったような気持ちが出て、嬉しくて嬉しくて涙が出ただよ」と話してくれました。その方には離れて住む息子様がいっぱいます。男性の私がお手伝いしたことで、大好きな息子様の姿と重なり、嬉しさが涙として込みあげてきたとの事でした。ボタンを直すことは些細なことです。しかし、その些細な優しさ1つで時に涙を流すほど喜び、感謝の気持ちを直接伝えて頂ける。介護の仕事の楽しさや喜び、心の温かさを感じました。介護の仕事に就き、本当に良かったです。